

滑稽句とは

日根野聖子

滑稽句の本質：

人の心のありようを内包する

滑稽句とは何か、

ごく簡単に言えば「面白い句」、「笑いのある句」ということになるのだろうが、ただこれだけでは、あまりに大雑把過ぎて、滑稽を何も説明していない気がする。

例えば…

チョコレートと桜餅の味を説明するとき、「甘い味」というだけでは、それぞれの味を説明したことにはならない。どちらも「甘い味」という広い概念でくくることはできても、この二つは決して同じ味ではないし、ただ甘いだけでもないからである。滑稽句も、単に「おかしい句」などと簡単に分類してしまうと、それこそ味気ないことになってしまう。

滑稽とは、例えて言うなら、笑いという袋の中に、人の心の喜怒哀楽、憎しみや恨み、妬み、敬意や思いやり、寂しさ、虚しさ…といったあらゆる感情が、細々入っているようなものではなかろうか。

川柳作家の時実新子さんは、「幸せすぎても不幸すぎても川柳は詠めない」とおっしゃっていた。幸せすぎると嘆く種がないし、不幸すぎると句を詠む心のゆとりがないからだそうだ。

「滑稽」も、ただ可笑しいだけの世界でもなければ、ただ哀しいだけの世界でもない。微妙にどちらかに傾くことがあっても、決してどちらかの極にのみ位置することはな

い世界である。人の心のあらゆる繊細なありようを、笑いの中に内包しているのが、「滑稽」である。

以下、私の拙句を挙げさせていただいたが、滑稽句の一つとご理解いただき、楽しんでいただけると有り難い。

- ◆ 先生を見下ろして泣き卒業生
- ◆ 平等にせむ栗飯の栗の数
- ◆ 美しく死ねる気がする鳥兜
- ◆ 兄の分ひとつ多くて柏餅
- ◆ 富士額だけが自慢よ桃の花
- ◆ ありふれた一日でした蜜柑食ぶ
- ◆ 生身魂小さくあくびし給へり

滑稽句の特性：

心の記憶を言語化する

滑稽句に限らず、俳句全般にいえることでもあるが、佳句は、限りなく普遍性をもっていて、多くの読み手に「そうそう、その通り！」と膝をたたかせ、うーんと唸らせる力がある。

自分が体験しながらも、言葉では表現できないでいた記憶を、わずか十七音字で鮮やかに再生してみせるのである。

私は、常々、佳句は視覚的であり、瞬間的な再現力があると思っているが、滑稽句は、これらの特性に加えて、読み手に可笑しみと、繊細な心の風景の臨場感を引き出す力があると考えるのである。

- ◆ 蜘蛛の子や避難訓練通り散る
- ◆ あちらこちら試食してゐる紋白蝶
- ◆ 舌の色見せあつてゐるかき氷
- ◆ どの子にも平等に向き扇風機
- ◆ 並ばせるラムネ飲みたい子らの口
- ◆ 空と海縫い合わせゆく飛魚よ
- ◆ よく動く喉仏なり生ビール

滑稽句のつくり方：

身の回りのあらゆるものと一体化する

滑稽句のつくり方については、滑稽俳句協会のホームページや八木健会長の著書などに紹介されているので、そちらを是非ご覧になっていただきたいが、その中でも私は、「擬人化」という手法に注目してみたい。

何故なら、今回、私自身の滑稽句を改めて拾い出してみて、擬人化の句が圧倒的に多かったからである。これまで、意図的に擬人化を意識してきたつもりはなかったが、結果的に擬人化が多くなっていたことを発見した次第である。

一般に、擬人化とは、“人でないものを人に擬して表現すること（広辞苑）”と理解されている。しかし、八木氏は、俳句での擬人化は一般のそれとは違って、「擬人化とは、ものを人のように表現することではなく、作者がそのものになりきることである」と説明しておられる。つまり、対象物を人のように扱うということにとどまらず、自身が対象物になりきったとき、擬人化の句ができるということである。

八木氏のおっしゃるところの擬人化ができると、対象物と自分自身が一体化し、対象

物は自分自身になり、自分の心の世界が投影され、どこかユーモラスな虫や植物やものの姿が現れるように思う。

- ◆ 伸び上がったり屈みこんだり焚火の火
- ◆ 裸木や空のあちこち突き刺して
- ◆ 湯豆腐のうたた寝昆布のお布団で
- ◆ 一晩中暴走北風の一味
- ◆ 好きな文字拾ひ食ひしてきららかな
- ◆ 手のひらに飽き手の甲へ天道虫
- ◆ 仏像の頬のゆるぶや桜餅
- ◆ 風船や児の目盗んで逃げにけり
- ◆ 産声を上げているかに木の芽かな
- ◆ 串刺しと火炙りに耐へ目刺かな
- ◆ かさぶたのやうに剥がされ薄氷
- ◆ 三回転きめて着地の木の葉かな
- ◆ 颯爽と古着着こなす案山子かな
- ◆ 六月の雨はトタン屋根が好き
- ◆ ふつふつと何やら言うて薺粥
- ◆ 烏瓜の朱は見つけてほしい色
- ◆ 脱ぎ捨てしパジャマのやうに蛇の殻
- ◆ 玉蜀黍歯列矯正不要なる
- ◆ 烏賊の眼の片方海の方を向き

滑稽句とは何か：

まとめ

俳句は、鳥や花、山や風といった対象物を描きながら、そこには作者の世界が自ずと映りこんでいるものであるが、滑稽句は、映りこむことをさらに超えて、作者が対象そのものと一体化することで生まれる。

滑稽句の世界では、虫や雨や草や人が、作者の心の風景の中で生き生きと動いている。誰もがどこかで見たことのある、何でも無い、ささやかな景色にもかかわらず、十七音字に切り取られた瞬間に、実際に体験した以上に鮮明で特別な場面になる不思議。そして、そこには一見、笑いの世界が広がりつつも、その奥に様々な心のありようが滲んでいる深さ。

滑稽の復興は、平成において、今やっと始まったばかりだが、滑稽句は、特殊な俳人が特殊な風景を詠んだものでは決してないことを、改めて確認しておきたい。むしろ、ありふれた日常の中に、普通に生きているからこそ、できるものではないか。おそらく、聖人にも極悪人にも、滑稽句は詠めないだろう。どちらにもなれず、ならずに生きていると思われる方は、是非、今日から、滑稽句に挑戦していただきたい。

滑稽句を詠むために、特別な体験は必要ない。

“これまでの人生、な一んも特別なことなどなかった”と、ぼやいている方、俳句という杖を手にご自分の心の風景を散策してほしい。歩いているうちに、必ずやご自身の、滑稽の豊かな世界に気付くはずである。